

新任教員紹介

航空宇宙学科 航空操縦学専攻・教授 桑原基晃

略歴

- 1945.7 満州国生まれ
- 1965.3 神奈川県立湘南高校卒業、その後中央大学法学部中退
- 1984.4 陸上自衛隊 PILOT 及び運輸省航空大学校実科教官を経て
運輸省航空従事者試験官
- 1992.1 運輸省機長路線資格審査官
- 1997.4 東京航空局前任航空従事者試験官
- 1998.2 運輸省航空大学校仙台分校長
- 2000.8 国土交通省首席航空従事者試験官
- 2003.6 全日本空輸（株）運航訓練室参与
- 2006.9 現職



担当科目

操縦実習、航空概論

研究活動内容

航空操縦学専攻は、2006年4月に全国で初めて開講した講座で大学在学中にプロのパイロットになるに必要な資格を全部取得することを目標に更に定期航空運送事業への就職を目指しているものである。従来日本に於ける定期航空運送事業へのパイロットのリソースとしては、大手が独自に行っている自社養成と(独法)航空大学校がその殆どで、不足分を防衛庁やその他のパイロット養成施設で補ってきた。しかし、「2007年問題」と言われるベビーブーマー・パイロットの大量退職で多数のパイロット不足が生じるであろうということが前提になっての今回の大プロジェクトである。

さて私たちプロのパイロットであったものにとって非常に困難な問題が今日の前にある。それは、学生諸君が目標を二つ持てるということである。パイロットに成ればそれはいいことだけれども、万が一だめでも学士として就職できるということである。定期航空運送事業への就職は非常に難しいものである。目標を入学当初から一つに絞らんだ(独法)航空大学校の学生の多数が就職できなかったという過去の一時期もあるのである。教職員の当面の指導の要諦は、目標を一つに絞り一心不乱にパイロットを目指させることだと思う。決して妥協させないことが大事であろう。

もう一つ重要なことは、操縦学の授業は学問というより実学といった方が適切だと思う。操縦学以外の授業は、理由があれば欠席も認められるが、操縦学は必ず補講をしなければならない。操縦訓練に支障を来すからである。このように学生諸君は、四年の間に学問と実学の両方を体験しなければならない(使い分けなければならないと言つてもいい)運命にある。私たち教職員は、このことを念頭に置いて調和のとれた指導をして行かなければならないと思う。

現在航空界では、技術論以外でいろいろな学問が複合的に技術の中に絡んできている。CRM (Crew Resource Management), HF (Human Factor) また認知工学の理論等であるが、惜しむらくはこれらが体系的に整理されていない。独立した理論として航空に入ってきてもどのようにして飛行という場で活用できるのかがわからない。これらを総合的、体系的に表現する作業は総合大学の研究テーマとしては適していると思う。

定期航空運送事業のパイロットになると一年間に数回の訓練や審査を受けなければならない。また最近は監査の制度が非常に厳しくなってきた様々な要求が出てきている。

これらのすべてに真摯に対応しようとする訓練、審査が結果的に並列化してくることになる。ここにおいて、パイロットの総合能力とは何かという理念からは遊離してしまうのである。

状況を適切に判断しその結果に基づき計画を立てそれを実行しそしてそれが正しかったかどうかをリチェックするという思考過程を、パイロットは常に繰り返しながら業務を遂行しているわけであるので、その思考過程の中に上記のような理論が複合的に組み込まれて運航の安全性を向上させることに繋がらなければならないのである。

航空機のハードウェアの発達はめざましいものがある。本来は、その発達に連動させてパイロットの総合能力というものを見直していくべきなのである。

2006年9月に採用されたばかりであるが、今後以上述べたようなテーマに取り組んでいきたい。

